

## 第 174 回広島ユネスコ講演会（ユネスコサロン）

テーマ 四国遍路と恩送り文化の世界への発信

講師 崔 象喜（チェ・サンヒ）Choi Sang-hee さん

今回は、外国人女性初の四国八十八ヶ所霊場の公認先達、崔象喜（チェ・サンヒ）さんを韓国のソウルからお迎えしお話し頂いた。



父の事故死、恋人の裏切り等の辛い経験から 30 代でうつ病になった崔さんは、父の供養にと四国遍路へやって来た。片言の日本語しかしゃべれなかった彼女を、他のお遍路さんや地元の人が真心をこめて世話をしてくれた。

四国では、男性、女性、年配者、若者、国籍、お金持ちか否か、そんな条件は一切関係なく、白い服（白衣）を着た途端、平等に「お遍路さん」になる。お遍路さんになるとお接待を受ける。お接待をしている人はお遍路さんから何も見返りを求めない。お遍路さんの中には、これまで受けた恩を誰かにお返ししようと行動に出る人もいる。

彼女の心に『ペイ・フォワード』というアメリカ映画が浮かんできた。一人の人が 3 人の人に良いことをし、良いことをされた 3 人が、これまた別の 3 人の人に良いことをして輪が広がっていくというもの。映画の中で展開していた、彼女の望む人々の姿、平和な世界がそ

ここにあった。

彼女が歩いた四国の遍路道には、形も言語も違う、様々な道しるべが既に存在していた。彼女は歩き遍路さんへの“お接待”のつもりで韓国語の道しるべステッカーを貼って歩いた。結果として「気持ち悪い韓国女が四国の道にステッカーを」「見つけたら剥がしましょう」といった差別的な張り紙が四国中では出回るようになった。本当に辛かった。日本の全国ニュースになり、韓国マスコミでも取り上げられた。良いことをしてもほんの小さな記事にしかないのに、ちょっと悪いことがあったら、こんな騒ぎになってしまう。彼女の心は本当に傷ついた。韓国の人から「もう日本には行かないほうが良い」と言われた。けれど彼女は実際に四国を回って、四国の人にどう思われているか自分の目で確かめたいと思った。

そして5回目の遍路にやってきた。彼女のステッカーは、時に無残に傷つけられていた。私のステッカーが嫌な人がいるのだったら剥がそう。そう思った彼女は一枚一枚剥がして廻った。一方で彼女を温かく迎えて協力してくれる人もいた。大月小学校の人権を考える授業に参加した。子供たちの作成した道しるべには何の差別もなかった。多言語で書かれていて、前向きで素敵なものだった。

外国人のお遍路さんや先達がいるのは、とても良いことだと思う。日本人が外国で「四国は素晴らしい」と言っても所詮自国の宣伝に過ぎないが、外国人が四国や日本を褒めると、より真実味があり海外からのお遍路さんも増える。

彼女の夢は、四国のお接待の文化＝恩送り文化を世界に広げて、平和に繋げてゆくこと。亡くなった人のぶんも生きること。生きるとは旅すること。幸せは恐れているものの中に

ある。だから恐れずにチャレンジしてほしい。彼女の韓国語の著書は、この夏、日本語に翻訳され出版の予定だ。皆さん、亡くなった人は、どうなると思いますか？彼女は言う。私は、私の心の中に生きています。ありがとうございました。



(文化部会理事 大村直生)